

# 看護を基盤とした養護教諭養成における養護実践力育成の検討 ～アクティブラーニングを用いて「養護」の意味を考えさせる～

佐久間 浩美, 藤原 昌太, 池谷 壽夫, 江黒 友美, 出原 嘉代子

了徳寺大学・教養部

## 要旨

本研究は、看護系大学における養護教諭養成課程の「養護概論」の科目において、アクティブラーニングを活用した授業の成果を検討することを目的とした。2018年度前期「養護概論」を履修した17名を対象に、15回目に行った授業内容を分析した。評価は、ワークシートの記述、授業終了3か月後に実施した質問紙調査より行った。その結果、多くの学生は、養護教諭の行う養護とは、ただ単に疾病や傷病者への対応だけではなく、子どもの発育・発達の支援を促す教育活動を意味すると理解していた。さらに、授業終了3か月後には、児童生徒の健康を守り気持ちに寄り添える養護教諭になりたいと回答するものが多くみられた。これらのことより、アクティブラーニングを用いた授業は、学生の養護教諭が行う養護の意味についての理解を深め、養護教諭を目指す意欲を高めることが示された。

キーワード：養護教諭、養護、看護、アクティブラーニング

## Consideration of Developing Practical Yogo Ability in Nursing-based Yogo Teacher Training : Using Active Learning to Encourage Students to Think About the Meaning of “Yogo”

Hiromi Sakuma, Shota Fujiwara, Hisao Ikeya, Tomoyoshi Eguro, Kayoko Dehara

Center for Liberal Arts Education, Ryotokuji University

## Abstract

This study aims to consider the results of classes that utilize active learning in teaching the subject “Introduction to Yogo,” which is part of the Yogo teacher training course in Nursing universities. The study analyzed the contents of the 15th class taught to the 17 students that enrolled for “Introduction to Yogo” for the first semester of 2018. Evaluation was based on worksheets and the questionnaire survey conducted 3 months after the course ended. As the result, many of the students understood that “Yogo” practiced by the Yogo teachers covered not only dealing with individuals with diseases or injuries, but educational activities that promotes growth and development of children. Furthermore, 3 months after the course ended, many answered that they wished to become a Yogo teacher that protects the students’ health and has the ability to empathize with their feelings. These findings showed that classes that utilize active learning depend the students’ understanding of the meaning of Yogo practiced by the teacher, and heighten their desire to become a Yogo teacher.

Key words: Yogo teacher, yogo, nursing, Active learning

## I. はじめに

近年、高等教育の授業改善において、学生の主体的な学びを引き出す学習形態である「アクティブラーニング」の必要性が指摘され、アクティブラーニングのための様々な手法、形態が提案されている。アクティブラーニングとは、課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な学びのことであり、一方的な知識伝達講義を聴くという（受動的）学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習<sup>1)</sup>である。この学習には、書く・話す・発表するなどの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴う<sup>1)</sup>。これは、「受動的な受講」から「能動的な受講」への転換を促すものであり、従来の「何を学ぶか」だけでなく、「何ができるようになるか」「どのように学ぶか」も考えた講義の展開が必要である。今後、このようなアクティブラーニングは、大学教育において益々求められるものとなる。

一方、教育現場では、いじめや虐待などの心の健康問題、性に関する問題行動、望まない妊娠、生活習慣病などの現代的な健康課題が山積している。そのため、児童生徒の養護をつかさどる養護教諭には、これらの課題を解決するヘルスプロモーション活動の担い手としての期待が高まっている。現在、養護教諭養成大学の7割が看護系大学で占められており、看護系大学の多くは、看護師国家資格の取得に重点を置いているため、養護に関する科目<sup>2)</sup>の「学校保健」「養護概説」「健康相談活動の理論及び方法」の科目は開講するが、それ以外の養護に関する科目の殆どを看護の必修科目に読み替えている。そのため看護系大学で行われている養護教諭養成教育では、養護教諭の実践能力を担保することが困難である<sup>3)</sup>と考えられている。実際に、教員養成学部以外で学んだ看護系大学の学生は、教員養成学部で教育に関する豊富な講義や演習を受けてきた学生に比べ、養護に関する専門的な教育が少ない点から、さまざまな困難を抱えている。例えば、健康診断や応急手当の方法など養護教諭の職務に関する実践力不足や、悩みを抱える児童生徒との関わり方や教職員とのコミュニケーションの取り方などの教員としての実践力不足などが挙げられる<sup>4)</sup>。しかし、養護教諭は、ほぼ一人職種であることから、養成機関が異なっても、教育現場においては、目の前に起きている児童生徒の健康問題をチーム学校の一員として解決していかななくてはならず、そのためには養成機関での実践的な学びが必要不可欠となる。そこで教育現場で即戦力となるためには、看護大学における養護教諭養成課程においても、健康問題を解決していく資質や能力を高めることが重要であり、学生が主体的に学ぶアクティブラーニングを取り入れた学修が必要になる。

アクティブラーニングの一つとして事例研究<sup>5)</sup>がある。事例研究は、対象とする事例（現象）に含まれる問題やその解決過程を分析して、そのなかに包含される普遍的な法則を見出そうとするものである。看護系大学では、患者や家族への看護ケアに焦点を当てた事例研究を通じて、習得した様々な看護専門科目と臨地実習ならびに関連領域の科目を統合させて思考できる能力を高めている<sup>6)</sup>。しかし、看護ケアに焦点を当てた個人を対象にした事例研究と児童生徒の発育発達に焦点を当てた集団を対象にした事例研究では、異なる面がある。そこで、本研究では、看護と教育の両面から児童生徒の発育発達を支援できるように、「養護に関する科目<sup>2)</sup>」の一つである「養護概論」（1年生対象）に、事例研究<sup>7)</sup>を用いたアクティブラーニングを取り入れた。本稿では、15回目に行ったアクティブラーニングの事例研究の手法を用いた授業の様子と、授業終了3か月後に行った学生への質問紙調査の自由記述の分析結果から、養護教諭養成課程の授業に、アクティブラーニングを用いた成果と課題を明らかにしていく。

## Ⅱ. 活動計画

### 1. 対象者

対象者は、本学、健康科学部看護学科で2018年度前期に開講した「養護概論」の科目を、受講した17名である。

### 2. 「養護概論」の科目内容と授業形態

本学の養護に関わる科目である「養護概論」の目標は、「①養護教諭は、児童生徒の心と身体、命を守る専門職であることを理解する②学校におけるヘルスプロモーション活動の担い手として求められる役割について説明することができる③授業のなかで積極的にディスカッションに参加し、自らの養護観、教育観、児童・生徒観をつくり上げていく」である（図1）。

本稿では15回目に行った「まとめ、養護教諭の職務の専門性～事例を通して養護の意味を考える」の授業実践を取り上げた。この授業は、大谷らが執筆した『養護教諭のための養護学・序説<sup>8)</sup>』のなかの事例を用いて、アクティブラーニングとして授業化したものである。事例では、養護教諭は児童生徒の疾病や傷病への対応だけではなく、児童生徒の一人一人の発達課題に応じた対応を行っている内容が記されており、授業では、この事例を用いて養護教諭の行う「養護」の意味について考えさせた。授業はワークシートを用いて進め、個人で考えたあと、グループで討論し、まとめた結果を発表させ、出された結論を共有した。

科目名	養護概論		
配当年次(1年)	単位区分 (選択)	単位数 (2単位)	開講時期 (前期)
到達目標:養護教諭は、児童生徒の心と身体、命を守る専門職であることを理解する。さらに、学校におけるヘルスプロモーション活動の担い手として、求められる役割について説明することができる。授業の中で、積極的に討論に参加し、自らの養護観、教育観、児童・生徒観を作り上げていく。			
全体目標との関連:本課程は、看護学科の養護教諭養成課程として、看護を基盤とした専門性の高い養護教諭を養成することを目指す。看護学科の目標は、看護職に必要な保健・医療・福祉の基本的な知識を身に付け、身体的、心理的、社会的に多様な視点での人の理解である。そのため、本科目では看護の知識や技術をもとに児童生徒を理解する看護職の視点と、学校ヘルスプロモーション活動を担う教育職としての視点から、養護教諭の職務を考える内容となっている。			
スケジュール			
①ガイダンス、学校保健と養護教諭……………学校における養護教諭の職務と専門性			
②養護教諭の歴史……………時代のニーズにより変化する養護教諭の役割			
③養護教諭と保健室……………養護教諭の職務の特質と保健室の役割			
④学校保健計画、学校安全計画……………学校保健計画の目的、立案、実施、評価			
⑤健康観察と感染症への対応……………学校において予防すべき感染症と健康観察の意義			
⑥健康診断……………健康診断の目的、実施、評価			
⑦フィジカルアセスメント……………保健室来室者への対応、フィジカルアセスメント			
⑧特別な支援が必要な児童生徒への対応……………特別な支援が必要な児童生徒への対応			
⑨学校安全と危機管理……………学校における安全教育、安全管理			
⑩健康相談活動……………養護教諭の職務の特質を生かした健康相談活動			
⑪保健学習……………養護教諭が行う保健学習の意義			
⑫学校環境衛生……………学校環境衛生の目的、実施、評価			
⑬疾病管理……………アナフィラキシーショックなどの緊急対応			
⑭ヘルスプロモーション活動……………いじめ防止に関する学校ヘルスプロモーション活動			
⑮まとめ、養護教諭の職務の専門性……………事例を通して養護の意味を考える			
教科書・参考文献:「学校における養護活動の展開」:津島ひろ江 出版社:ふくろう出版			
評価方法:毎授業中のレポート30点、最終テスト70点			
履修上の注意:授業中は、積極的に討論に参加してもらいたい。また、児童生徒が置かれている社会情勢に興味を持ち、幅広い知識を得るため、多くの書物を読んでもらいたい。			

図1 養護概論 シラバス

事例は、経験年数20年以上のベテランの養護教諭が行った小学校5年生、A男とB男、二人の男児児童への対応である。A男は喘息の持病を抱えており、B男は言葉で思いを表現することが苦手な児童である。ある日の休み時間、A男はB男に首を絞められたため、担任教諭に付き添われ保健室に来室する。B男は、うなだれながら、担任とA男の後からついてくる。授業は、このような場面から養護教諭がA男に行った応急処置の対応と、B男に行った健康相談活動の二つの場面を用いて進めていった。ワークシートは図2の通りである。

<p><b>事例】</b>10月×日10時30分、休み時間の出来事。小学校5年生の児童A男とB男は、同じクラスである。A男は、喘息発作をたびたび起こし、B男は言葉で表現するのが苦手な児童である。担任教諭が、B男に首を絞められた喘息気味で病弱なA男を抱きかかえて保健室に来た。B男は担任とA男の後ろ側にうなだれて立っていた。</p>
<p><b>【A男に対して行った養護教諭の対応】</b></p> <p>①何があったのかと、まず、あわてて駆け寄った。それからA男をソファに座らせた。</p> <p>②次に「どこが一番苦しいのか」と尋ねた。さらに脈をとって、早いけれどもしっかりとしていることを確認した。</p> <p>③そして喘息が起こったかもしれないと考え、背中に耳をあてて喘鳴を確認した。</p> <p>④喘息でないことを確認し、「苦しいけれど喘息おきていないから大丈夫だよ。」と言った。</p> <p>⑤A男が「首を絞められた、苦しい」と言っているのを、「お水を飲んで首をちょっと冷やしてみようか」というとA男はうんと答えた。</p> <p>⑥そして水を飲ませて背中をさすった。</p>
<p><b>【B男に対して行った養護教諭の対応】</b></p> <p>⑦B男に向かって小声で、「いきなりだって、A男さん言っているけど何かあったの？教えてくれる？」と尋ねた。何も言わないB男に向けて養護教諭は身をかがめてB男の言葉を待った。</p> <p>⑧A男が、「いきなりやられた」と繰り返し言っていたが、「今はB男さんに話を聞いているから。」とA男を制した。</p> <p>⑨B男に向かって「しつこいのが嫌だったんだよね。しつこくしないでって、言いたかったんだよね。」と尋ねると、B男は小さく「うん」とうなずいた。</p> <p>⑩続けて「でも、A男さんの首を絞めて、しつこいのが嫌だと言うあなたの気持ちは伝わった？」とゆっくり尋ねた。B男は、「ううん、伝わらなかった。」と答えた。</p> <p>⑪そして「嫌だった気持ちを分かってもらうにはどうすればいい？」とB男に尋ねた。B男は、「もっと口で言えば良かった。」と小さな声で言った。</p> <p>⑫B男に、「じゃ言って試してごらん」と促した。するとB男は「しつこくされるのが嫌だったけど、首絞めてごめん。」と小声でA男に謝った。</p> <p>⑬A男の表情が変わり「いいよ、僕も少しはしつこくして嫌がっていたの、わかっていたけど、しつこくしてごめん」とB男に謝った。</p> <p>(この事例は、『養護教諭のための養護学・序説』ジャパンマシニスト 2008年 大谷尚子著 p78を加筆修正した。)</p>
<p><b>【発問1】</b>来室直後のA男に対する対応で、養護と看護が重なる部分、養護特有の部分はどこだと思いますか？考えられる箇所に下線を引きどのような理由で行ったのか理由を述べてください。</p>
<p><b>【発問2】</b>B男に対する対応で、養護教諭が大切だと思い行った対応はどこでしょうか？どのような意味があるのでしょうか？考えられる箇所に下線を引き理由を述べてください。</p>
<p><b>【発問3】</b>A男とB男、二人に対して行った対応から、この養護教諭は、子どもとの対応で大切にしていることは何だと思いますか？</p>

図2 15回目の授業で用いたワークシート



### Ⅲ. 活動評価と分析方法

授業中の学生の活動の取り組みは、グループ発表の内容やワークシートへの記述により評価した。また、授業3か月後の質問紙調査の内容は、養護概論の授業の感想、授業後に自分の課題だと気づいたこと、目指したい養護教諭像であり、回答記述をコード化し、カテゴリーにまとめた。

### Ⅳ. 倫理的配慮

本研究は、了徳寺大学生命倫理審査委員会の承認（受付番号3047号）の承認を得て実施した。

### Ⅴ. 結果

養護概論の15回目、「養護教諭の職務の専門性～事例を通して養護の意味を考える～」の授業では、以下の結果が得られた。まず、発問1で問いかけた「A男に対する応急手当の場面で看護と養護が重なる部分はどこか」についてグループで考えさせたところ、重なる部分については、「ソファに座らせる」「背中をさする」などの苦痛の軽減、「苦しいところを尋ね」「脈を測り」「喘鳴を確認する」などの重症度、緊急性の確認、「苦しいけれど喘息が起きていない」「水を飲ませて首を冷やす」などの確な判断と対処などの意見が出された。このことから、養護教諭が行う児童生徒へ対応部分の多くは、看護と養護に共通していると理解されている様子が窺えた。しかし、養護特有の部分については、分からないとの意見が多かった。そこで、「養護教諭が、保健室の入り口に立っているA男のそばまで、あわてて駆け寄ったのなら、A男はどのような気持ちになるのか?」「喘鳴の確認に看護師であれば聴診器を用いるはずだが、養護教諭は、A男の背中に耳を押し当てている、これにはどのような意味があるのか?」と再度問いかけた。すると学生から、「A男は、あわてて駆け寄った養護教諭を見て、『自分は心配されている』と思った」「養護の先生が自分の背中に耳を押し当ててくれていることで、A男は安心できた」との意見が出され、養護教諭は、一人一人の児童生徒に、あなたが心配だとのメッセージを伝え、安心感を与える対応をしていることに気づくことができた。

B男に対する対応で、発問2で問いかけた「養護教諭が大切だと思った対応はどこか? どのような意味があるのか」に対しては、「A男が言った言葉をさえぎりB男の話を聞く姿勢を示したこと、けがをさせたB男に対しても平等に接しようとした」「養護教諭は、B男が言葉で表現することが苦手なことが分かっていたから、B男になぜこのような事態になったのかを気づかせ、自分の気持ちを伝えるよう促す対応を行った」などの意見が出された。このようなB男への対応から、学生は、子供たちに自分の力で、自分の課題を乗り越えさせようとしている養護教諭の意図を理解することができた。

最後に、発問3で問いかけた「A男とB男への対応から、養護教諭が児童生徒への対応として、何を大切にしているのか」に対しては、「安心した環境をつくり子どもの素直な考えを引き出している」「原因や解決策を見出す補助はするが、結論は子ども自身に考えさせ、自分で解決する力を養おうとしている」などの意見が出された。これらのことから、養護教諭は、保健室を子どもたちの安心の場として設定し、子ども同士の相互作用を見守っていること、子どもが自分自身の課題を解決できるよう支援していることを理解することができた。授業後の感想記述では、「たった一つのけがの処置で、子どもの意見を聞きだし、その子どもたちの意見を尊重し、それぞれの子どもの発達段階の解決に繋げていくのは難しいことだけれど、その対応は養護教諭にしかできないなので大切にしたいと思った」「看護師と養護教諭の仕事内容は似ているが、一つ違うところは、子どものけがや病気だけではなく生活態度や交友関係などを考えて、親

身になって子どもと同じ目線、立場に立って対処することだと思った」など、養護教諭が児童生徒の発育・発達を願う教育職であることに気づき、自分なりの養護観を深めている様子が窺えた。

また、養護概論の授業が終了した3か月後の質問紙調査では、受講した17名すべての者が、養護教諭の職務についての理解が深まったと回答していた。そして、自分自身の課題として、けがや病気に対する判断力や、問題をさまざまな視点から考える洞察力、コミュニケーションやカウンセリング能力の不足が挙げられていた。さらに、看護の力を活かす、児童生徒の気持ちに寄り添う、児童生徒の安全を守る、学校全体の健康問題に気づけるなど、自分なりの養護教諭像が示され、そのような養護教諭になれるよう今後の学修を頑張りたいとの記述が示された。

表1 授業3か月後の質問紙調査の結果

質問項目	カテゴリー	代表的なコード
授業を振り返って	養護教諭の職務理解	養護教諭の職務について具体的に学ぶことができた
	児童生徒への理解	現代の子どもたちの課題を学ぶことができた
	学校保健への理解	学校保健法や学校環境衛生について知ることができた
	グループ活動の有効性	話し合う機会が多く、積極的に参加できた
	授業の楽しさ	毎回の授業の資料が分かり易く楽しかった。
自分自身の課題	判断力	けがや病気についてのアセスメント力と対応力
	洞察力	児童生徒が抱える問題を様々な視点から考える力
	カウンセリング力	児童生徒の気持ちに寄り添い、カウンセリングを行う力
	コミュニケーション力	コミュニケーションをうまくとれる力
目指す養護教諭像	看護の力を活かせる養護教諭	看護師免許状を持っている強みを生かした養護教諭
	児童生徒の気持ちに寄り添う養護教諭	児童生徒の立場に立って寄り添える養護教諭
	児童生徒の安全を守る養護教諭	児童生徒の安全、健康を第一に指導できる養護教諭
	学校全体の健康問題に気づける養護教諭	児童生徒のいじめや虐待に気づき、子どもの声なき声に気づける養護教諭

#### Ⅳ. 考察

養護概論の15回目の授業で行った「養護教諭の職務の専門性～事例を通して養護の意味を考える～」の授業後には、多くの学生が、「養護教諭には、看護の知識や技術を生かして傷病や疾病に対する的確なアセスメントや処置を行うだけではなく、児童生徒がそれぞれの課題を乗り越え成長できるように、教育的な視点から支援する役割がある」と理解していた。

このように学生が、養護の意味について理解を深めることができた要因として、事例研究を用いたことがある。事例研究の特徴として、①体験学修を疑似的に体験できる②第三者の体験を自分の体験として研究し、問題を分析し結論を創出する③個人の考えをもとに討論することによってさまざまな視点から考える力を育成できる④個人の結論をもとに、グループの結論を導き出すことによって議論する力を育成できることが示されている<sup>7)</sup>。また、学んだ知識が現実の問題に繋がっていることを知り、その後の学修への動機づけができることも示されている。

本研究で用いた事例は、大谷らの研究グループ<sup>8,9)</sup>が、実際にこの事例に登場する養護教諭に、「何をしたのか」「それからどうしたのか」と問いかけながら、養護教諭が行っている日常的な実践を構造化し、養護の意味を理論的にまとめたものである。この事例の養護教諭のように、子どもの成長にとってどのような支援が必要であるのかを常に考え、子どもの心に寄り添う姿が学生の心を動かし、学生は養護教諭の実践を疑似的に体験することができた。そのことにより、学生は事例を自らの問題として捉えることができ、グループ討論によって養護の意味を導き出せた。そして3か月後においても、自分の目指す養護教諭

になりたいとの意欲を高めることに繋げることができている。このように学生が導き出した養護の意味は、教師によって一方的に教え込まれたものではなく、学生が主体的で深い学びをすることで得られたものである。

本授業で用いた事例研究では、学生が主体的に学ぶアクティブラーニングとしての効果が示された。しかし、さらに実践的な学びにするためには、実際の養護実践から、養護教諭が何をねらい、どのように子どもに働きかけていたのかを、学生自らの力で理解する必要がある。そのためには、学生が教育現場に向き養護実践についての参与観察を行い、内省的に観察し、概念化させる学びも必要になる。今後の課題として、本研究で得られた結果をもとに、学生がより主体的に学ぶことのできる教育モデルを検討し、学生の学びを深めさせていくことがある。

## Ⅶ. 本研究の限界

本研究の対象は、1大学で17名と少数である。今後は他大学とも連携を図り、アクティブラーニングを用いた授業効果を検証し、より主体的に学ぶ教育モデルを構築する必要がある。

## Ⅷ. 参考文献

- 1) 溝上慎一 (2014) アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換, 東信堂, 東京. 3-24.
- 2) 文部科学省: 教育職員免許法・同施行規則の改正及び教職課程コアカリキュラムについて, 文部科学省ホームページ, [http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/\\_icsFiles/afieldfile/2017/07/27/1388004\\_2\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2017/07/27/1388004_2_1.pdf) (2018.10.1 10:00アクセス)
- 3) 後藤ひとみ, 天野敦子, 鎌田尚子ほか (2001) 養護教諭養成における看護系四年制大学のカリキュラムに関する一考察－課程認定の現状から捉えた議題を中心に－. 日本養護教諭教育学会誌. 4 (1), 89-99.
- 4) 佐久間浩美 (2015) 看護系4年生大学における養護教諭養成の課題～ A 大学の現状から～, 千葉県学校保健学会年次大会講演集, 54-55.
- 5) 武藤安子 (1999) 事例研究法をめぐって 1. 日本家政学会誌. 50号, 541-545.
- 6) 甲斐鈴恵 (2010) 学生の認識の発展を促す実習指導に関する事例研究－小児看護学実習における指導者(研究者)の認識に焦点を当てて－. 日本小児看護学会誌. 19(3), 32-38.
- 7) 一般財団法人全国大学実務教育協会 (2014) 能動的学修の教育研修リーダー講座テキスト, 一般財団法人全国大学実務研究協会, 東京. 56-59.
- 8) 大谷尚子 (2008) 養護教諭のための養護学序説, ジャパンマシニスト, 静岡. 66-93.
- 9) 中川裕子, 阿部寿美子, 笹川まゆみ (2006) 日常的「養護」対応の分析的研究第2報－言葉で思いを表現することが苦手な児童の事例検討から－. 学校健康相談研究. 2 (2), 13-22.